



教員生活を振り返ると何故か失敗したことばかりが先にうかんでしまう。

私が教員としてスタートした平成の初期、今でいう海洋システム科の3年生は数班に分かれ交代で島根半島のある港を基地にあご（トビウオ）を刺し網で獲る実習を行っていた。

私も実習教員2名と一緒に生徒を引率して「みこしま」に乗船し実習を行った。宿泊は港に隣接した漁協の二階を使用させていただいた。

何故かこのときの実習、往航も漁業実習風景も全く覚えていないがその途中からは鮮明に記憶している。

今でもそうであるが、私自身が生徒へ厳しく指導することはあるが、同じ事であつてもうちの生徒のことをよく知らない方から言われると我慢ができない。

確か金曜日の午後であつたと思う。実習最終日。港に帰ると漁協の職員の方が出迎えてくれた。「先生、最後だから一杯やろうや。」

私は、基本的に生徒引率中酒は飲まないがこのときは違った。何故ならその職員から、今回来た生徒はなんかダメだな〜！（詳細は忘れたが）否定的な事を言われた。もう我慢出来なかつた。

よ〜し、今晚酒を酌み交わし懇親を深める・・・ではない。相手は二人。相手の2倍酒を飲み続け相手を潰してやる。つまり酒飲み競争でコテンパンにやつつけてやろうと思つたのである。「うちの生徒をバカにしやがって〜」とにかく許せなかつた。

飲み会といつても、漁協の事務所ですルメイカを着にちよつと酒を飲むだけである。お店など近くにはない田舎の漁港であつた。

事務所にいくとストープの上に大きなヤカン。その中で日本酒が温められていた。熱燗というやつである。よ〜しこれか！と気合いを入れた自分がいた。しかし、私はここで痛恨のミスを犯していたことに気付いていなかった。そもそも私は日本酒など御神酒程度で、飲んだことはほとんどなかったのである。でも気合いで勝てると思つていた。乾杯！ストープと大きなヤカン。飲み会の記憶はそれしかない。

「お〜い！酒井さん。帰るか？」実習の先生の声が聞こえる。当時の「みこしま」は後部に船室があつた。そこに寝ていたのである。振り返ちにあつただけは理解できた。おかしな事を聞いてくるなどは思ったが、（全く記憶はないが）昨晚の恥ずかしさと早く港から離れたこともあり、頭が痛いのを悟られないよう元気な声で「帰りましょう。」と返事をし、また深い眠りについた。

しばらくするとドゥーン！バサ！大きな揺れと波の音で目が覚めた。生徒のことが気になり船尾に出ると、全員ライフジャケットを着用しハウスの陰に集まっていた。外は大時化である。ブリッジに行くと自動操舵から手動操舵に切り替え、肩幅に両足を拡げ波の間をぬうように操船する実習教員の先生がいた。

「波が高いぞ。どうする？」しばらく間を置いたが、民間から来たばかりの頃である。時化ではいたが、これくらいにしたいことはないと思っていた。本心である。そこで「進路を隠岐島前に向け、波が穏やかになったら島後の島影を利用して西郷に向かいましょう。」と指示をだした。我ながら満足のいく選択であった。

通常より2時間程度は遅れたが西郷港に無事入港することができた。西郷港はいつも私たちを穏やかに迎えてくれる天然の良港である。

学校に隣接する岸壁には、多くの先生方が出迎えてくれた。やり遂げた充実感も少しばかりあった。

着岸し片付けにはいろいろとしていたところ、「校長先生がお呼びです。」との声がかかり、代表して私が出向くことにした。片付けが終われば後で行くのに、どうせ「ご苦労さんだったね。」くらいの会話だと思っていた。

「酒井、入ります。ただ今帰りました！」元気よくビシッと決めた挨拶をした。

「なぜ帰ってきた。大時化ではないか！・・・校長先生の目は明らかに怒っていた。でも私は言っている意味がよくわからなかった。「時化ていきましたが大丈夫ですよこれくらい。民間では当たり前ですよ。」と言ったとたん「バカもくん！ここは民間ではない！」それはそれは隠岐島後の最高峰「大満寺山」が噴火したのではないかと思うほど大きな声であった。

後でわかったことであるが、当日は隠岐汽船全便欠航。それにもかかわらず、わずか十九トンのみこしまが出港したとの情報が入ったが、いつまで待っても入港してこないことからとても心配していたとのことであった。多くの先生方が出迎えたのは意味が違っていたのである。当時は携帯電話などなかった。

事前に天気図等で天候調査をおこなうべきであったが、酒で勝負を挑み返り討ちにあってしまいそれどころではなかったことなど言い訳にもならなかったし言えなかった。「酒井さん。帰るか？」と実習の先生が聞いてきた意味がようやく理解できた。

あれ以降「バカもくん」の言葉はないが、校長室の自席に座ると常にその時の校長先生が今でもこちらを睨んでいる。校長室に掲げられる歴代校長の写真は私のような教員への戒めのためにあるのではないかと思うのである。